ものをつくる生涯学習活動の現状と課題

―陶芸サークルなごみ会の活動を通して―

Current situations and issues of lifelong study where the one is made

―Through the ceramic art circle [Nagomi] association―

江村 和彦
Kazuhiko Emura

目　次

Ⅰ　はじめに
Ⅱ　刈谷市の生涯学習活動
Ⅲ　生涯学習としての陶芸
Ⅳ　陶芸講座～刈谷市の場合～
Ⅴ　陶芸サークルなごみ会
Ⅵ　窯焚きの集い「高橋さんちの窯焚き」
Ⅶ　考察
Ⅷ　おわりに

Ⅰ　はじめに

生涯学習活動という言葉は広く一般的になっているが、筆者が直接その活動と関わりを持つようになったのは、愛知県刈谷市が運営している市民講座の陶芸講座の企画・指導を依頼された 2001 年からである。陶芸の制作を専門としてきた筆者にとって、講座でやきものづくりを指導することは経験がなく困難なことであった。しかし年齢も職種・立場も様々な受講者が真摯に指導を受けて、自分で作り上げた作品に一喜一憂し、楽しく談笑しながら土に向かっている姿を見て、筆者自身これまでの経験にない学びの形として新鮮に映った。以来生涯学習センターでの陶芸指導、民間での陶芸講座、子どもや身障者を対象にしたワークショップの実践を重ね、人々がどのように学びに取り組んでいるのかを研究してきた。そこで人は年齢に関わらず誰でも学びたいという気持ちは持っている筈であると感じ、それをいつでも実現できるのが生涯学習社会であると考える。

では生涯学習とはどんなものだろうか。日本ではまず生涯教育について 1981 年の中央

教育審議会答申「生涯教育について」でこう示している。「生涯教育とは、国民一人一人が充実した人生を送ることを目指して生涯にわたって行う学習を助けるために教育制度全体がその上に打ちたてられるべき基本的な理念である」としている。国民一人ひとりがいつでも学ぶことができる、生涯学習を支援するシステムとして「生涯教育」があるという。また 2006 年（平成 18）12 月に改正された教育基本法第一章（生涯学習の理念）第三条では「国民一人一人が、自己の人格を磨き、豊かな人生を送ることができるよう、その生涯にわたって、あらゆる機会に、あらゆる場所において学習することができ、その成果を適切に生かすことのできる社会の実現が図らなければならない。」として、生涯学習をおこなうシステムとして主眼が個人ではなく社会全体に向けられたことに着目したい。学習を受けるだけでなくその成果を生かし能動的に学ぶという形を国民一人ひとりがつくりあげていくことを理想としている。本研究では陶芸という「ものをつくる」生涯学習活動の一例を通して、地域の生涯学習活動、社会教育活動の現状とそこでの活動意欲のよりどころを探り、その効果を取り上げ今後の課題、可能性を見出していきたい。

Ⅱ　刈谷市の生涯学習活動

愛知県刈谷市には市の施設を利用して参加できる活動として市民講座とサークル活動がある。同じ場所で同じように活動しているが、その中身は異なる。市民講座は生涯学習活動である。刈谷市は第二次刈谷市生涯学習推進計画の中で生涯学習活動の中から社会教育活動としてサークル活動が盛んになるように取り組んでいる。その活動拠点となるように 2001 年 4 月に刈谷市南部生涯学習センター、2008 年 4 月に刈谷市北部生涯学習センター、2010 年 4 月に刈谷市総合文化センターを開設した。

生涯学習センターは従来からある公民館では補うことの出来ない専門的な設備を常設し、さまざまな活動を支える目的で建てられた。施設の定期的な利用が増加すれば地域の人々の交流の場として有効に活用されると想定したわけである。刈谷市南部生涯学習センターでは身障者デイサービスと老人デイサービス施設、60 歳以上が無料で利用できる入浴施設と隣接した娯楽室、学童保育施設など地域の様々な人が利用できるようになっている。北部生涯学習センターではガラス工芸、調理室を備え、温水プールも隣接している。刈谷市総合文化センターではより多くの利用者が使えるように、大規模な創作活動室、調理室、茶室などを備えている。そして 3 つの施設いずれにも電気窯を含めた陶芸設備を備えている。その設備によって市民講座としての陶芸だけでなく、その後の自主的な陶芸制作活動の定着、持続を促すことをねらいとしている。

Ⅲ　生涯学習としての陶芸

刈谷市の生涯学習センターに陶芸室が設置されることには、陶芸という分野、素材としての土、制作過程などから大きく５つの利点、魅力があると考える。

１．可塑性

やわらかい粘土を一度握ればそのままの形を保っている。この性質が可塑性である。しかも握力の弱い小さな子どもからお年寄りまでそれなりにかたちづくることが出来、そして特別な道具でなくても、さまざまな器や置物なども作ることが出来る。制作までの導入段階が少ないことも利点である。

２．素材の変化

陶芸という技法の製作過程にもその魅力があるといえる。手のひらの中で自由にかたちづくられたものが、水分が蒸発して乾燥とともに粘土の色も変化する。土は販売されているものだけでなく身近な場所で採掘して使うこともでき、オリジナルの粘土を用いてつくることができる。また素焼き、本焼きという焼成過程を経て硬く焼きあがれば二度と土に返ることがない。物質の変化を意識させるものである。（図１参照）

３．多彩な表現が可能

やきものの表面は釉薬と呼ばれる薄いガラスの膜で覆われている。釉薬はやきものを丈夫にし、水分を浸透させない役割がある。また多種多様な色、質感を表現することが可能であり、土の種類や焼成を変えることでその表現の幅は無限大に広がる。絵付け作業も絵画表現とは違う面白さを感じながら取り組めるようでまさに十人十色のやきものが出来上がることがより興味を引くものになっている。

４．用途のあるものを作る

器などを作ればそれらでお茶を飲んだり、食事をしたりと使うことが出来る。自分が作ったものが生活の役に立つということは、作品に愛着が湧き満足度も高くなり、制作意欲を刺激するものである。作ったものが生活の役に立つことは工芸全般に言えることであるが、大きく言えば日本人が多種多様な食器を用いて食事をする文化を持っていることもやきものを作りたいという意欲につながっているのではないかと考える。

５．窯に入れて焼くということ

作ったものが窯というフィルターを通して、全く別の物に生まれ変わる。「いち窯、に土、さん細工」や「窯の神様」と言うような、陶芸制作の仕上げ段階で全てが左右される手の届かない領域が窯である。現在では電気やガスの窯が主流で、コンピューター制御で予定の温度まで時間通りに焼いてくれるものもある。窯を焚くという作業は楽になり、仕上がりも毎回同じように焼けるようにはなった。しかし窯のふたを開けるという行為は何度やっても不安と期待が混じった刺激的なものである。

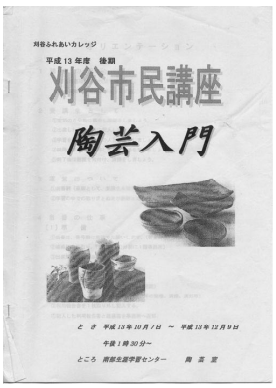
土練り ⇒ 成形 ⇒ 乾燥（成形後1週間以上） ⇒ 素焼き（8時間かけて800度） ⇒ 絵付け ⇒ 釉薬掛け ⇒ 本焼き（12時間かけて1230度） ⇒ 完成

図 1. 陶芸制作の流れ

Ⅳ　陶芸講座～刈谷市の場合～

1．刈谷市民講座の概要

刈谷市ではさまざまな市民講座が開講しており陶芸講座もその中のひとつである。市内3ヶ所の生涯学習センターでそれぞれ陶芸講座が開かれている。年間2期、4月からと10月から8回～10回の日程で講座が開かれ、1回2時間半～3時間の講座を実施、内容はそれぞれの講師に委ねられているが基本的な技法や焼き物の基礎知識などを学習しながら数多くの作品作りをしている。（図2）



回	月　日	内　　容
1	10月　7日	開講式　湯のみ・茶碗をつくる
2	10月14日	マグカップ・水差しをつくる
3	10月21日	花器をつくる
4	10月28日	自由につくろう
5	11月4日	楽しい絵付け・釉薬を掛ける①
6	11月11日	お皿・筒型の器をつくる
7	11月18日	模様をつける
8	11月25日	脚のある器をつくる
9	12月　2日	楽しい絵付け・釉薬を掛ける②
10	12月　9日	つくった器を使ってみましょう

図 2. 刈谷市民講座　陶芸入門

その講座を修了した人々の中から、さらにいろんな技法を覚えたい、自由に作りたいなどの講座の枠では要望が叶えられないと感じるようになり、自由な陶芸活動が可能な自主サークルを立ち上がるようになった。刈谷市としても自主サークルが出来て施設利用が増えることで、生涯学習活動の輪が定着し、新たな人々のつながりが出来て活動が広がることを期待している。

2．市民講座と自主サークル

市民講座と自主的なサークル活動では具体的にどんな違いがあるのか、刈谷市の陶芸講座とサークル活動を比較してみる。（図3）

市民講座

- 自治体が講座内容・日程を決定し運営する
- 作るもの、数は限定
- 講座に来て作るだけでよい
- 参加費用は安価

自主サークル

- 自発的、自主運営
- いつでも好きなものが作れる
- 費用は市民講座よりも割高
- 活動範囲の自由度がある
- 講師を選べる

図 3. 市民講座と自主サークルの違い[1)]

市民講座と自主サークルの違いは主体性である。市民講座は全て用意された中で楽しく作れるように、市と講師が企画運営しているのに対し、サークルは企画・運営から窯焚き、材料費に至るまで全てを自己負担、自己責任で行わなければならない。具体的に以下のような項目が挙げられる。

- 粘土および道具・釉薬の調達、管理
- 活動する部屋の確保、使用料の支払い
- 窯の道具の掃除
- 窯の使用料の支払い、ほかのサークルとの窯の日程調整
- 窯焚き（窯詰めから窯出しまでの作業全般）

市民講座では上記の項目は全て市の負担で、作業については講座の講師と助手が行っている。また窯の管理は一部生涯学習センターのスタッフが行う。窯焚きの手順は①作品を窯に詰める　②電源を入れる　③湿気抜きの穴にふたをする　④焚きあがってから電源を切る　⑤数日後窯出し、というものである。窯を焚く作業は、長時間かけて窯内部を 1200℃以上の高温にするため安全管理の意識を持って作業しなければならない。指導を受けなければ自治体も、サークルのメンバーたちも不安である。そのため、講師が窯の基本的操作方法を指導し、設備の適切な窯の運用を心がけている。また釉薬は好きな色を選ぶことも出来るがサークルの負担で業者から購入するか、原料から調合してつくりバケツなどに入れて保管する手間がかかる。生涯学習センターではそれらの保管庫を常設しているのでグループごとにスペースを与えられ管理している。これだけの手間がかかるにも関わらず、サークル活動が盛んなのはやはり講座では得られない魅力があるからと考えられる。それは講座では材料や道具が全て用意されて、受講者全員が同じものを制作し時間通りにほぼ満足するようなプログラムを組んでいるので、上達が早い受講者にとっては物足りない点があげられる。また窯づめ窯出しなど焼く作業に携わることができず陶芸全体の作業を体験できないこともサークル活動に参加の要因になっていると推測する。土から焼く作業まで一連の流れを体験するには至らないからである。次に刈谷市南部生涯学習センターで活動している陶芸サークルのひとつを取り上げ、なごみ会というサークルを取り上げその活動内容など具体的に見ていく。

Ⅴ　陶芸サークルなごみ会

１．４つのサークル活動

刈谷市南部生涯学習センターでは４つの陶芸サークルが随時活動している。メンバー構成、活動時間などは以下の通りである。

・なごみ会（19 名、土曜午後、さまざまな年齢層）
・どろんこ会（20 名以上、金曜午前、高齢者中心）
・サークルたんぽぽ（8 名ほど、木曜午前、主婦層）
・わかば会（10 名ほど、火曜午後、主婦層）

これら４つのサークルはいずれも講座を修了した後に発足している。活動曜日や時間などは主になるメンバーが活動しやすく設定してあり、同じ陶芸室を効率よく使用している。ここでは発足当時から筆者が講師として関わっているなごみ会について述べていきたい。

２．なごみ会の概要

なごみ会は刈谷市南部生涯学習センターで行われた市民講座「陶芸入門」［陶芸（初級）］を修了した数人を中心として 2001 年 12 月に発足し、現在も活動を続けている。なごみ会のメンバー構成は老若男女非常にバランスよく集まっているといえる。主婦、定年を迎え新たな趣味を探しにきた男性、県外から転勤してきた若い夫婦などその顔ぶれもさまざまである。（図 4）

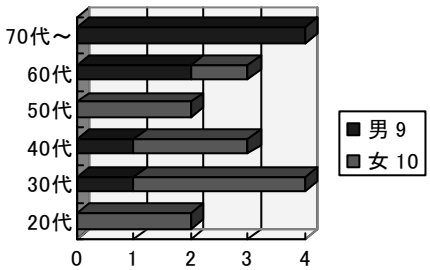


図 4．なごみ会の会員構成[2)]

活動日は毎週土曜午後１時から４時まで。役割も決めて、会長、副会長、会計が中心となり会を運営している。会長、副会長は一年間の運営の道筋を立てて、毎回活動終了時に窯のスケジュールや課外活動の連絡などをする。会計は会員からの会費の徴収と管理、活動拠点の陶芸室の使用予約や課外活動の金銭的手配などをする。講師は 2001 年から 2009 年までは毎週指導にあたっていたが、現在は月に２回程度来て技術指導をする。活動は会員全員でおこない、講師は技術的指導に専念している点が特徴的である。

３．なごみ会の活動

なごみ会での活動概要は大きく分けて以下の４つである。

１）陶芸室での創作活動
２）なごみ会ツアー
３）市立美術館ギャラリーでの作品展
４）窯焚きの集い

1）陶芸室での創作活動

毎週土曜日午後1時から4時まで刈谷市南部生涯学習センター陶芸室で活動を行っている。各々その時間帯に自分の作りたいものを自分のペースで作っていく。講師は適宜メンバーに声を掛けて指導はするが、個々の制作についての強制力はない。各自作りたいものをイメージして、それについての必要な技法などを講師と話し合いながら作り上げていく。初めて陶芸をする人も講師が指導することもあるが、何年も通っているいわば先輩が基礎的な技法を教えていくこともある。メンバーにとっては講座と違い時間的拘束が比較的ゆるやかなことが長続きする要因になっているようだ。毎週来る人もいれば月に1度などまちまちである。また作るよりも陶芸室に来てメンバーと談笑して帰るというサロン的な要素もこの会の活動の魅力になっていると考える。

思い思いに制作に励む

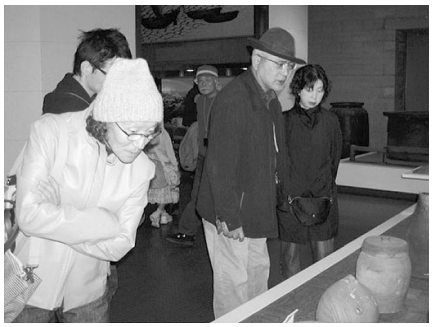
電気窯の窯詰め作業

2）なごみ会ツアー

なごみ会ツアーとして年2回ほど近隣のやきものの産地を訪れ工房や美術館資料館などを見学する。マイクロバスを借りて移動し食事を楽しみながら陶芸室を離れて様々な話をするなど、互いの交流を深める機会となっている。また普段作っているときに湧き上がった疑問を講師に投げかけ展覧会場で説明を受けたり、互いに議論しながら今後の制作に生かそうとより展示作品に興味を持ってみることも出来る。陶芸室では学べないことがこのツアーには盛り込まれている。

記念撮影・瀬戸

瀬戸・霞仙陶苑見学



常滑・民俗資料館を見学

昼食のひととき

3）市立美術館ギャラリーでの作品展

刈谷市美術館ギャラリーでの展覧会を企画、展示する。2008 年 8 月、2010 年 8 月に開催した。2 年に 1 回のペースで行うことを決めている。会場の予約は 1 年前に抽選で行われ、搬入搬出は各自、DM 製作、期間中の当番などメンバー全員で役割分担して運営する。毎回各自がアイディアを練り、時間を掛けて作った作品が並ぶ。ディスプレーもそれぞれが工夫を凝らしながら行い、初心者には経験者がアドバイスしながら時間を掛けて飾りつけをする。過去 2 回の展覧会では会員の 8 割が参加し、真夏の展示にも関わらず多くの人に見てもらう機会を得ることが出来た。

工夫を凝らした展示

作者とともに

展示風景

記念写真

4）窯焚きの集い

やきものは窯に入れて焼きあげるものである。なごみ会では生涯学習センターの窯で月に１回の素焼き、本焼きを行っている。そのほかに窯焚きの集いと称しては常滑にある貸し窯を使っての窯焚き体験とメンバーのひとりが所有する窯をみんなで焚くものである。いつもと違う焼き方を体験する活動をそれぞれ年１回ずつ行っている。生涯学習センターでの窯焚きは電気窯で酸化焔焼成であるのに対し、常滑やメンバー宅の窯は還元焔焼成という異なる方法で焼き上げる。酸化焔と還元焔では、普段使えない釉薬を掛けることが出来、また同じ釉薬でも酸化焔焼成とは全く違う仕上がりで焼くことが出来るのがメリットである。またガス窯の操作を覚えたり、直接焼いている窯の内部を観察したり焼成中にサンプルを取り出すことが出来るなど、炎を見る窯焚きの醍醐味を味わうことが出来る。常滑の貸し窯での窯焚きは交代で空き時間にやきもの歩道を散策するなど、焚く経験以外にも楽しみを見つけている。

窯詰め完了

焼き上あがりを確かめるメンバー

Ⅵ　窯焚きの集い「高橋さんちの窯焚き」

なごみ会の活動の中でもこのサークルを一番特徴づけているのが窯焚きの集いである。ここでは普段の窯焚き経験とは違うガス窯の窯焚きの特徴を詳細に押さえながら、そこでのなごみ会メンバーの取り組み、楽しみ方を見ていきたい。

１．電気窯とガス窯

普段のなごみ会の活動では生涯学習センターの電気窯で焼成しているが、年に２回プロパンガスを使った窯で還元焔焼成によって焼き上げる。窯焚きの集いは普段の焼き上がりとは味わいが違いメンバーも楽しみにしている。その窯の違いとはどんなものか、電気窯とガス窯の長所と短所を比較してみたい。

電気窯

○電源スイッチを入れてフタをすれば自動制御で焼くことが出来る。

○毎回ほぼ同じ焼き上がりになる。（酸化焔焼成）

○炎が出ないため安全である。

△いつも同じ結果なので新鮮味に欠ける。

△窯の電熱線が傷むような貝殻などを入れて変化を楽しむ焼き方が出来ない。

ガス窯

○電気窯と同じ釉薬でも違う仕上がりに焼くことが出来る。（還元焔焼成）

○直接火を見ることで窯焚きの臨場感を味わうことが出来る。

○もみ殻や貝殻などを使って、焼き方の工夫が出来る。

△点火から焼き上がりまで常時目が離せない。

△予定通りに温度が上がらない。

△仕上がりの予想がつかない。

電気窯の一番の長所は安全性である。火を使わないこと、時間通りに焼きあがることも長く使っていく上で重要である。ただし単調な仕上がりと応用が利かないのが短所である。一方ガス窯は反対に火を使うことが最大の長所である。焼成中に窯の中の炎を見ることが出来、付きっきりで窯を焚かなければならないし、仕上がりも絶対ではないがその分臨場感を味わえる。

2．窯焚きの概要

窯焚きの集いのひとつ「高橋さんちの窯焚き」はメンバーのひとり高橋さんの自宅にあるガス窯で年1回行われている。ここでは2004年11月16日に行われた窯焚きの様子をまとめたものを見ていきたい。

窯詰めは前日までに行われる。窯の規模が小さいのでひとり2,3個入れる程度になる。隙間がないように工夫しながら窯詰めをしていく。それぞれの協力がなければスムーズに作業は出来ない。焼成時間はおよそ12時間。早朝5時に点火し、グラフに沿って温度が上がるように、ガスの圧力を上げていく。ガスでの窯焚きはいつも同じように温度が上がっていくものではない。季節や天候、窯の中の作品の密度などで予定通り温度が上昇しないことがある。そこでガス圧や空気弁を調整したりして窯を焚いていく。経験を伴う作業なので講師が指導にあたり、メンバーは都合のいい時間にきて、自分の出来る作業を行うことになっている。初めて参加する人は炎の勢いに驚き、経験者は窯の操作を教えながら、窯焚きの面白さを伝えながら、最後まで過去の事例を活し全員が協力して焼き上げていく。窯の温度は30分置きに確認する。

窯焚き作業工程

前日までに窯詰めを行う。

当日

am　5：00　　点火

am　8：00　　250℃　窯のフタを閉めてガス圧を上げる

am 11：00　　950℃　還元に入る（煙突部分の吸気弁の調整）

pm　3：00　1050℃　ガス圧を上げて温度を上げる

pm　5：00　1200℃　還元を弱める

pm　5：30　1230℃　サンプル取り出し

pm　6：00　1230℃　窯焚き終了

2, 3 日後、十分温度が下がってから窯出しをする。

慎重に窯詰めをする

窯焚きの合間のひと時

還元の炎を確認する

３．窯焚きの一日

窯を点火してから定期的に温度の確認はするが、それ以外は特に作業はないので、みんなで食事をしたりお茶を飲んだりしながら過ごす。自作の器に料理を盛って互いの器を見せ合ったり、経験者が窯の操作や釉薬の話を初心者に教えたりする。またやきもの以外にも話は及びお互いの交流がさらに深まる。

窯の温度が 950℃に達したら、煙突部にあるダンパー（空気調整弁）を閉めて空気の循環を抑えて窯の中を一種の酸欠状態にする。すると焼かれている作品自体に含まれる酸素が燃えて還元作用が起きる。土や釉薬が酸化焼成とは違う色に変化するのはこのためである。還元は窯の中の炎が酸素を欲しがり外部へ噴出す現象が起きる。この炎の出具合で還元作用が効いているかを判断する目安となる。これも窯を焚いている面白味を実感する瞬間である。

窯焚きも大詰めを迎え、色見サンプルを取り出す作業は高温になった窯の内部を見ることが出来、メンバー全員でその過程を見守る。サンプルを取り出す作業は未経験者の役割になっている。真っ赤に熱せられたサンプルをバケツの水で急冷し釉薬が溶けているかを

確認する。溶けていれば窯が予定温度に達したことになるのでガスを止めて終了。2,3 日後、窯が冷めたことを確認して窯出しをする。

サンプルを取り出す

窯出しした作品

この高橋さんちの窯焚きから分かることは、以下の 3 点があげられる。

・窯の火を見たり窯の操作を覚えたり、普段の活動では得られない体験が出来る。

・お互いの作品を見て、具体的にどのように作ったなどゆっくり話をして陶芸室では得られない情報を得る。

・食事をしながら、お茶を飲みながらみんなで窯を焚いているという一体感が生まれる。この窯焚きはただ作りたいものを個々が好き勝手に作っているのでなく、互いを理解して協力しながらひとつのことを作り上げていく、しかもそれを楽しんで行っていることに意味があるといえる。自分たちで活動しているサークルの結束が強くなると共に、制作意欲が湧くような体験が出来る機会になっている。

4．アンケートと現在の動き

なごみ会のメンバー 19 人にアンケートを取り、「今後なごみ会でやってみたいことはありますか？」という問いに対し以下のような回答を得られた。

・自分で原料を調合してオリジナル釉薬を作りたい。

・各地のいろんな窯を巡りたい。

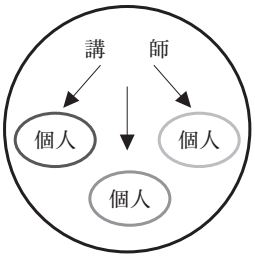
・展示販売やフリーマーケットに参加したい

など、常に個々が新しいことを見つけて楽しんで取り組んでいる姿がうかがえた。それぞれの思い、アイディアがなごみ会全体の動きとなり、2010 年秋には蒲郡市内で行われたフリーマーケットに参加するに至った。このことは大きな一歩である。これまでにもなごみ会は 2 度の展覧会を行って作品を外部の人々に見せることはしてきたが、フリーマーケットは展示即売する場所である。自作の器などを販売するという行為は直接自分の作品評価を得られる機会である。作品が売れた時の喜びはより制作への意欲を掻き立てるものである。また知らない人々と作品の販売のやり取りをすることはなごみ会というひとつのコミュニティをさらに外側に向けた活動として、とても意味があるといえる。

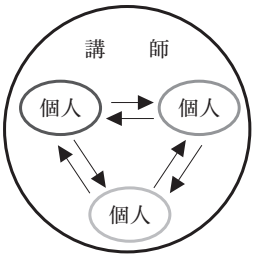
クラフトフェア蒲郡 2010 の案内ハガキと当日の参加したブースの様子

Ⅶ　考察

このなごみ会の活動の特徴は、生涯学習センターの陶芸室という拠点を持ちながら、その活動の輪を広げている点にある。個々が自由に制作しながら、サークル全体の活動を豊かなものにしようとそれぞれが役割を見つけて行動している。一方講師は技術指導に専念するかたわら、その活動を見守りつつメンバーと共に行動することを心がけていることも会の運営の潤滑油になっていると考える。先に述べたように、刈谷市の市民講座での講師と受講者の関係を見ると受講者はあくまでも受身であり用意されたプログラムに従って制作をしていく、一方通行の関係図が想像できる。それに対してなごみ会はそれぞれが自主的に活動しているが互いに教えあいながら、情報を共有して個々のつながりが活発になり結びつきが強くなる。それらの活動を俯瞰するように指導者が存在する。つまり互いにコミュニケーションをとりながら教え学びあう共同体をかたちづくっていると言える。その活動はゆっくりではあるが、着実にそして多様な方向へ広がっている。まさに「学習により成果を適切に生かす」ことが出来ていると言える。ただしそれは生涯学習として市民講座の内容が基礎的な技法・知識を楽しく獲得できて、より学びたい、作りたいと思えてはじめて次の活動への芽が出ると考える。それなしでは、社会教育活動としてのサークル活動がよりよいものにならない。そのためには、市民講座を企画する刈谷市、指導する講師とそれぞれのサークルが情報交換をして連携して、継続するということが生涯学習のかたちが出来上がっていくと考える。



市民講座の活動イメージ



なごみ会の活動のイメージ[3)]

Ⅷ　おわりに

20 世紀末の生涯学習は「生きがいづくり」に主眼が置かれていたが、今世紀に入ってからは「まちづくり」が主なテーマになっている。生涯学習の中で、ものを作るという行為は技術的指導を受けて個々の内面と向き合いながらつくりあげていくものである。それが出来上がった後、今度は完成した「もの」を介在して人と人とが交流する。制作過程も完成後も様々な人々とつながりを作ることが出来るものを作る生涯学習活動は、「まちづくり」に発展する理想的な姿である。全国各地で地域と連携したものづくり活動は盛んに行われているが、継続性を持たせるためには常に地域とコミュニケーションを取れる状態を作っていくことが一番の課題である。そのためには拠点をつくり、ゆるやかに存在していつでも誰でも活動に参加できることが望ましいと考える。

注

1）江村和彦「地域との連携によるものづくり教育活動について～なごみ会の場合～」P. 31

2）同上　P. 31

3）同上　P. 35

参考文献

・田中雅文・坂口緑・柴田彩千子・宮地孝宜　著
『テキスト生涯学習－学びがつむぐ新しい社会－』学文社（2008）
・小池源吾・手打明敏　著『生涯学習社会の構図』福村出版（2009）
・久田邦明　著『生涯学習論～大人のための教育入門～』現代書館（2010）
・香川正弘・鈴木眞理・佐々木秀和　編『よくわかる生涯学習』ミネルヴァ書房（2008）
・江村和彦・加藤克俊・藤田雅也・西村志磨・樋口一成　著
『地域との連携によるものづくり教育活動の報告Ⅱ』P 56
第 32 回美術科教育学会仙台大会研究発表概要集（2010）
・江村和彦「地域との連携によるものづくり教育活動について～なごみ会の場合～」ものづくり教育研究
NO. 2　ものづくり教育会議（2011）